

|               |                                            |         |         |
|---------------|--------------------------------------------|---------|---------|
| 氏名            | 國 見 直 樹                                    |         |         |
| 学 位 の 種 類     | 医 学 博 士                                    |         |         |
| 学 位 授 与 番 号   | 乙 第 1483 号                                 |         |         |
| 学 位 授 与 の 日 付 | 昭和59年 9 月30日                               |         |         |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）               |         |         |
| 学 位 論 文 題 目   | リンパ球幼若化能からみた子宮頸癌患者の所属リンパ節および<br>末梢血リンパ球の検討 |         |         |
| 論 文 審 査 委 員   | 教授 栗井通泰                                    | 教授 木村郁郎 | 教授 小川勝士 |

### 学位論文内容の要旨

子宮頸癌患者の細胞性免疫能を、所属リンパ節リンパ球および末梢血リンパ球について、頸癌由来の培養株細胞である OG 細胞と腫瘍リンパ球混合培養（Mixed Lymphocyte Tumor cell Culture, MLTC）を行い、あわせて、PHA, Con A による幼若化能を  $^3\text{H-TdR}$  のとり込みから測定した。1）リンパ球，OG 細胞混合培養（1：1 培養）において、正常人末梢血リンパ球では全く反応がみられなかったが、癌患者では stimulation index 2 以上の陽性が末梢血リンパ球で36%に、リンパ節リンパ球で33%にみられた。2）PHA, Con A によるリンパ球幼若化能からみると、担癌患者の免疫能は末梢血，リンパ節のいずれのリンパ球においても有意に低下していた。3）癌患者末梢血リンパ球において、Fetal calf serum（FCS），患者自己血清および他子宮癌患者血清の3種の血清を添加し、その抑制効果を比較検討すると OG 細胞との MLTC において FCS 添加群に比較して、自己血清，他子宮癌患者血清添加群に有意な抑制が認められた。4）所属リンパ節間における幼若化能の比較検討から、免疫能は二次リンパ節である内・外鼠径節の方が、一次リンパ節である内・外腸骨節，閉鎖節より高い傾向がうかがわれた。以上の検討より自家癌細胞の替りに培養株細胞である OG 細胞を用いることによって MLTC の手技は簡便化し、しかも培養株化した細胞になお癌特異抗原が存在していることが推測された。子宮頸癌患者の病態を追求する上で PHA や Con A などの非特異的 mitogen のみでなく、さらに培養細胞を用いることによってより幅広い免疫学的な検索が可能になった。

## 論文審査の結果の要旨

子宮頸癌患者の細胞免疫能を、所属リンパ節及び末梢血リンパ球により、頸癌由来培養株 (O.G) と腫瘍患者リンパ球混合培養を行い、PHA, ConA による  $^3\text{H}$ -TdR のとり込みを測定 1) 混合培養で癌患者ではリンパ球に陽性率が30%を越えて認め、2) 担癌患者のリンパ球は末血、リンパ節とも有意に低下を認め、3) OG 細胞との混合培養に於て FCS 添加群に比し、自己血清、他子宮癌患者血清添加群に有意な抑制を見出した。これは OG 細胞の混合培養法を見出したのでこれらは何れも重要な知見で価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。